

# Agora

2004. 7. 9. 発行

一橋大学大学教育研究開発センター

No. 8

## バトンゾーンにさしかかって思うこと

— 本学の教育を不斷に改善・向上させるシステムの構築にご理解とご協力を —

大学教育研究開発センター長 藤田 和也



当センターが発足して1年と4カ月が経つ。このセンターは、主として学部段階(undergraduate)の教育活動の充実・改善のために、その研究開発と教育活動支援を主たる任務として設置されたものであるが、そのための体制整備と活動の創出はまだ途上にある。

センターの当面の課題は、「中期目標・中期計画」にも掲げられているように、この体制と活動の整備・充実に努めながら、本学に、センターを核として教育活動を不斷に改善・向上しつづけることのできるシステム(これを称して教育力向上システム)を構築することにある。そのシステムとは、①教育活動を不斷に点検・評価する活動と、それとともに、②授業改善やそのための研修機会を提供する活動、さらに、③カリキュラムやそれを支える指導体制についての持続的な研究開発の活動、を相互に有機的に関連づけながら進めることを通して、これら3者が回転して教育力向上の力動を生み出していけるような自己運動システムのことである。

このシステムづくりは、現在、その途についたばかりである。①については、手始めに学生による授業評価が実施されているが、これのみではなはだ不十分である。これ自体の改善工夫の余地があるし、学生からのフィードバックの方法としても、もっと

他の方法で補完されなければならない。加えて、授業分析・授業診断による授業者へのフィードバックも工夫される必要がある。さらには、授業だけでなく、教育条件面や授業以外の教育活動の点検評価も定期的になされる必要がある。

②については、年2回の全学FDが軌道に乗りつつあるが、こうした集団的な研修機会の提供もさることながら、より強く必要とされるのは、個々の教員の授業改善努力を支援する活動(授業改善のための相談援助、情報提供、相互交流の機会の提供など)を充実させることである。残念ながら、現在、これには全く手をつけることができていない。

③についても、プロジェクトで検討が始まったばかりであるが、これからはこの作業は不斷に続けていくことが求められるであろう。

しかも、これら3者が個別に進められるのではなく、相互に関連づけられて、3者で回転運動を起こしていくようになればこのシステムは一応の完成をみる。そのためには、教員の方々の理解と参加・協力が不可欠である。それがシステム全体の回転エネルギーとなるからであり、また逆に、参加・協力が得られないと、核となるセンターだけがカラ回りして全体の渦になっていかないからである。

その回転を支えるハンドルを確実にバトンタッチできるよう最後のバトンゾーンをしっかりと走らなければ、と気を引き締めている。

## 目 次

### バトンゾーンにさしかかって思うこと

藤田 和也 センター長 ..... 1

### I. 特集 <授業評価に関する学生の座談会>

学生による授業評価と大学教育の「質」の向上

北川 文美 ..... 2

### II. 全学FD研修会(第2回)報告

1. 隣の芝生
2. 研究・教育の多様化・専門化のなかでの共通教育への期待

古澤ゆう子 ..... 6  
石倉 雅男 ..... 6

### III. 新採用教員オリエンテーションの報告

北川 文美 ..... 7

・平成16年度(前期)大学教育研究開発センター日誌 ..... 8

## I. 特集 <授業評価に関する学生の座談会>

### 学生による授業評価と大学教育の「質」の向上

北川 文美 (大学教育研究開発センター)

今回のアゴラ特集記事では、授業評価に実際に参加してきた本学の学生が、授業評価アンケートに対してどのような意見を持っているのかについて、5名の学生による座談会という形での意見交換を行いました。

一橋大学において学生による授業評価が試行的に導入されたのが2002年夏学期、2002年冬学期に第一回全学授業評価アンケートが実施されました。試行段階も含めると、これまでのべ4回の授業評価アンケートが実施されたことになります。座談会には、所属や学年の異なる5人の学生参加者のかたほか、藤田センター長が教員の立場として、また授業評価の実施に携わるセンターの立場から参加・発言しました。

2時間あまりにわたり、現在の授業評価実施の問題点、授業評価票をいかに改善するべきか、新聞部による授業ランキングの功罪、学生による授業評価の結果を大学教育の改善にどのように結びつけるかなど、活発な意見交換の場になりました。なお、座談会の内容は、紙幅の都合上、ここでは一部のみを掲載し、また割愛・編集した部分があります。座談会全体の詳しい内容については、センターのホームページ上、さらにセンターニュースに掲載する予定です。

#### 座談会参加者

川本 洋平 (経済学部2年) 前期自治会執行委員会  
高野友貴子 (商学部3年) 後期学生会執行委員会  
稻川 琢哉 (社会学部2年) 新聞部  
浜ノ園一成 (社会学部4年)  
大野由加里 (大学院修士1年)

藤田 和也 (大学教育研究開発センター センター長)

#### 司会

北川 文美 (大学教育研究開発センター 専任教員)



### 学生による授業評価の問題点・何を改善するべきか

司会 これまでに皆さんが大学で受けた授業の中で、とても感銘した授業と、あまり関心を惹かないと思ったような授業もあったかもしれません。その時にその違いがこの授業評価の中に、自分の実感通りに表現されているのでしょうか。それがズれている、違和感があるとすると、これは学生がいい授業だなと思っているものがうまくチェックできない、評価できないものになっているともいえるわけです。今この評価票の項目を改めてみて、学生側からはどんな問題点があると思いますか。

大野 初め、授業評価と聞いて、学生が本当に正当に評価できるのかとか、学生に評価する資格があるのかという疑問はあったのですけれども、何回か授業評価を繰り返すにつれて、それが慣れになってしまって緊張感がなくなってしまって授業評価自体がルーチン化してしまったという感があります。授業評価自体

の疑問点として三つあります。まず、面白い・面白くないとか、評価に関しては主観性がすごく入ってきてるので、どのように客観的に評価されているのだろうという疑問がずっとありました。次に、この授業評価が自分たち学生にとってどのくらい有効性があるのだろうという疑問がありました。最後に、質問事項があらかじめ大学側から決められているということに対しても疑問があって、この項目 자체を学生で作ればいいなと思います。現在は、必ずしも自分にとってプラスになる授業が、この授業評価によって示されていないと思うところがあります。

稻川 最後の授業にこの授業評価の紙を渡されるのですが、その中で先生の受け取り方もまた違うと思うのです。授業評価を自分はちゃんとされているのだと実感してやっている先生とやっていない先生が多いと思います。最終的に冊子になって公開されるというのはあるのですけれども、それを意識してやっている先生とそうでない先生といらっしゃい

ます。先生がこの紙を配るのですけれども、「ちゃんとやってくださいよ」とか言う先生もいるのですけれども、「適当にやってください」とか言う先生もいます。

**浜ノ園** 私は4年生なので、2年生の冬学期から正式な授業評価が始まりました。自分としても2年の冬学期から毎講義、講義に出たびに簡式の授業評価を自分自身で付けていました。その中で感じるのは、大学の実施する授業評価は最後に付けるものなので、全体の印象を反映できていないのではないかというところです。最後の授業にやると、自分たちの書いたものがどんなにフィードバックされても、自分はもう一回その授業を受けられないので、学生が自分で書いて意味があると思えるかどうかという問題もあります。フィードバックしやすいアンケートの採り方とかを考慮に入れていただけるとうれしいと思います。

### 新聞部における結果の公表について

**司会** 新聞部では授業評価の結果を一橋新聞に公開していますが、これはどのようにやっているのですか。

**稻川** 授業評価結果の冊子を参考しまして、教養科目はなしにして学部の授業だけ対象にして、授業評価結果の冊子には先生の名前が載っていませんから、去年の講義要項と時間割とを参照して先生の名前を公表するというかたちでやっています。参考にしている項目は「授業に対する満足度」で、それで平均点で一番分かりやすく出ているので、それをランキングにして出しています。それでも手作業でやっているものですからけっこリクスが伴うわけで、今回も不手際がありまして、誤報が出てしましたのですけれども、それでもうちの新聞のスタンスとしてはランキングにして学生が一目で見て分かりやすいからやっているというのがあります。内部の人間ですから、実際読者の話を聞いているわけではないのです。だからどこまで意識されているのかなと。一目見てこんなものなのだと思うのか、あるいはこれをずっと参考にして、この先生の講義は採りたくないなとか思うのかというのをちょっと聞きたいのですけれども。

**高野** これをなるほどと見る理由は、やっぱり大きい冊子を見るのが大変だからなのです。参照できる

場所が決まっているというので、なかなか図書館にも行かず、教務課の前で見るのもちょっと恥ずかしく、ほとんど見ないので、あまりわからないのです。私が新聞部にやってほしいと思うことは、大人数の授業の評価が低いというのはありますから、例えば商・経・法・社で分けるのではなくて、必須かどうかとか、人数分けがあるといいかなとは思います。そういう意味では、みんながどういう傾向を持っているのかというのを知るうえでは、新聞部のランキングはすごくいいと思います。

**大野** 私はこの新聞部のベスト・ワーストスリーの公開には賛成です。ものすごくインパクトがあって分かりやすい。ただ、問題として客観性がどこまであるかとか、0.1の微妙な差がどこまで考慮されているのかとか、そういう問題もあると思うのですけれども、学生はそういった問題を前提としてこのベストスリー・ワーストスリーを見ていると思います。だからこれが絶対的な基準であるとは、多分ほとんどの学生が思っていないと思うので、この公開は学生にとっても教授にとってもすごくいいインセンティブになると思うので、これからも続けてもらいたいと思っています。

**浜ノ園** 0.1、0.2ポイントの差でワーストを競うというのはなかなか難しいかなと思う反面、0.8、0.9とか1ポイント近い差が開いた場合は明らかに差があると見ても問題はない感じがします。なので、ベスト・ワーストで出してしまるのは難しいかなと思う一方、低いほう・高いほうという群として見ればやっぱり違いはあると思います。けれども、あまりがちっと出してしまうと、ワーストが本当に3位、2位、1位という印象になってしまるのはあまりいいことではないのかなと個人的には思います。ランキングでは、「この教官のこの講義はワースト」と言っているのですけれども、実際には「この教官が駄目だ」というイメージとして伝わってしまうという点が問題だと思います。

**川本** 一読者として見ると、受講人数が増えるほど基本的に評価は下がっていくというところからすると、大体去年受けた授業がワーストに入ってきています。それは実際に受けてみた者から言わせてもらうと、それは低くて当たり前なのかなという授業はかなり多かったです。先生のつまらない感もあるかもしれないのですけれども、やはり科目としてのつまらなさもあったのだと思います。この授業評

価のベスト・ワーストスリーを出すというのは、戦略としてもありますし、見る機会が少ないものですから、授業評価を一橋新聞が出すというのは賛成です。

藤田 ただ、授業評価というのは授業のほんの一端しか評価していませんから、自分の授業全体を評価されたように思わなくともいいし、人格まで評価されているように感じてしまう必要はないのですけれども、例えば皆さんも偏差値にさいなまれてきた経験があると思いますが、このベスト・ワーストというやり方は、そういう雰囲気を引き起こさざるを得ない。そうすると、先生方がこの授業評価に向かう姿勢といいますか、感情を含めて非常に複雑になってくるのです。それでも学生たちが自分の授業をどう見ているかということを自分できちんと認識し、その結果をきっちり公表するという真摯な姿勢を大事にしたいと思っているので、それ以上の変なプレッシャーとか、あるいは歪んだ感情といいますか、そういうものが広がっていくようななかで授業評価が実態化していくと、授業評価そのものをいいものに育てていきたいと実施する側は思っているのですけれども、それに水を差したり、歪めたりすることになるという心配を持っているのです。学生と教員が一緒になって授業を良くしていこうと、そのための手段として授業評価を活用しようという姿勢で臨んでいるときに、このやり方が本当にプラスに作用するのかどうか、ということを考えてほしいというのが私の思いです。

浜ノ園 ただ、評価をランキングとして公表することによって講義の方法を変えていこうという意識について刺激を与えていているという点では非常にいいことなのかなと思います。プレッシャーに耐え切れずに、もうこんな評価はあてにならないという教官もいらっしゃるかもしれないで、そうならない程度にうまく刺激が行っているのであればいいのかなと思います。

大野 今大学院になって授業を受けているのですけれども、大学院の授業と学部でされている授業は全く質が違うし、授業方法も違うのです。明らかに大学院の授業のほうが質が高いし、先生のやる気もすごくあって情熱が伝わってくる授業です。だからこのワーストスリーに入っているというのは、先生にとって良いインセンティブになるのではないかと思いました。

## 授業評価について思うこと

川本 大学が授業評価をするというのはいいことだと思います。授業が面白かったかとか、役に立ったかというのは、簡単に数値化できるものじゃないと思います。一番わかりやすくしようと思ったらやはり5段階評価になると思います。ただ、0.1点とか0.2点の差なんていうのは、数値化する際に誤差も出てくると思うので、全部数値だけで判断するというのは異議があります。だから、自由記述というか、学生がどの意見でも出せるようなアンケートにしてほしいと思います。

高野 そういう観点に立つと、そもそもこういう講義評価というものの自体が、個人個人の教官の側から出てくるものであってほしいというのがあるのです。やはりアンケートというのは、ある意味大学側からの押し付けになってしまふと、それはアンケートされる教官にとっても学生にとってもいいことではないと思うので、私は個人個人の教員の希望とか熱意によってアンケートをやってもらうというのがベストなかたちなのではないかと思うのです。

大野 4年間いろいろな授業を受けて思ったのですけれども、自分の研究が忙しいからということで大学の教育を軽視されている教授が想像以上に多いということに愕然としました。だからこの授業評価というのは本当にいい役割を果たしていると思っています。ただ、この授業評価自体がどういう実効性を持つのかということに疑問を持っています。例えば教授の昇進とか給料アップとかそういうことにつながると、更に教授のインセンティブを高めると思うし、この授業評価自体の力をもっと強めていきたいと、学生の立場から思っています。

浜ノ園 今の話と逆になるかもしれないのですけれども、授業評価票をどれだけ工夫したとしても、すべてを網羅的に評価することはできないと思うので、完璧なものになることはないと思います。講義ごとの相対的な評価を重視するよりは、教官自身のすべての項



目の相対評価。何が悪かったのか、その悪かった点は自分が高めようとして悪かったのか、例えば教材とか器具は使わないでやろうと思っていて悪かったのか、それともちゃんと使っていたのに悪かったのかとか、そういう点を自分自身のフィルターを通してみることが重要だと思います。結局は生かすも殺すも教授しだいだと思うので、全体的に良かつた・悪かったというよりは、こういったところを重視しているのだという信念を持って、評価の結果を参考程度に使っていくのが一番なのかなと思います。あまりにも評価票の結果が重くなり過ぎると、評価票の評価を高めるための講義というのを考えてしまうようになると思うので、そうなると教官それぞれの個性を殺してしまいそうで残念かと思います。

**藤田** こういうかたちでの授業評価の方式というのは、本当に限界性があって、その人の授業のはんの一部の最低共通項目を拾っているだけなのです。だから、それでもってその人の授業全体がとらえられると誤解しないほうがいいと思います。だからこの授業評価を過大評価しないというか、答えるほうも等身大で使ってほしいし理解してほしい。そんなことも浜ノ園君がおっしゃったように、私も全く同じ理解の仕方をしています。その人の授業について、受けた人たちがどんな感想や意見を持っているのかということを、自分で受け止めて改善していくべきわけです。だけど、全体的に最低必要な要件を満たしているかどうかとなると、こういうふうに標準化した質問項目で数値化しようということになるわけです。それにはメリットとデメリットがあるというご意見の両方ともよく分かります。

もう一つは、話題になったフィードバックといいますか、この評価が双方向的な効果を持つには、最後に授業評価をやるというのは問題があるというのを承知なのですが、やはりいくつかの限界があるのです。そうなると、私たちが今考えているのは、まだ実施できるかどうか分かりませんけれども、最後にやる授業評価と、途中でやる授業評価と、随時自分でカバーするような補足的なチェック。私はときどき授業でミニリポートということで授業についての意見も含めて書いてもらうのですけれども、そういうものを時々織り込みながら、途中でフィードバックして、後半の授業に生かしていくというやり方、

そういういくつかの組み合わせを補足的にやっていく余地は十分ある。それをどのくらい一律にやれるかというのは財政的に難しいのですけれども、これをカバーするような評価シートを開発しなければいけないと思っています。

これは弁明になりますが、そんなことを思っていまして、皆さんの評価による効果がもう少し実感としてわくような対策を、授業評価の方式以外に工夫しなければいけないということを強く思わされました。まだまだいくつか感じたことがあるように思うのですけれども、もう少し時間を置いて反芻させていただきます。

## 座談会を終えて

座談会の中で何度も、授業評価票の中の「自由筆記」の部分をもっと大切にしてほしい、という学生の参加者からの意見が出されました。さらに、授業評価の時間を十分にとり、学生が自由に意見を書けるようにしてほしいという要望もありました。また、Q14からQ18の「教員自身が設定できる問題」の欄をもっと、積極的に利用するべきであるという意見がありました。「教員自身が今回こういったことを重視したいのだというところを初めに講義をする前の段階で持っていて、それについて自分で達成できたかどうかという、自分自身のチェックシートとして、独自の設問は使ってほしいと思う」という意見は、個々の教員の授業改善にとって、学生の側から提示された非常に建設的な意見であるように思いました。また、画一的な授業評価票ではなく、「個人個人の教員の希望とか熱意によってアンケートをやってもらうというのがベストな形なのではないか」、さらに、学生自身が自分たちで「先生、こういうところは良くないんですけど」と言いに行かなければいけないのでは、といった、「双方向的」なコミュニケーションの必要性に関する発言が多く見られました。授業評価はこのようなコミュニケーションのひとつであり、その限界とよい意味での緊張感を認識しつつ、今後は、その実施にあたり、もっと積極的に学生の皆さんのお意見を反映していく必要があるように思われました。この場を借りて、今回の座談会に協力・参加してくださった方々にお礼を申し上げます。

学生による授業評価のあり方について、ご意見、コメントなどございましたら、以下へお願いします。  
大学教育研究開発センター rdche-que@rdche.hit-u.ac.jp または アゴラ編集部 agora@rdche.hit-u.ac.jp

## Ⅱ. 全学FD研修会（第2回）報告

### 1. 隣の芝生



FD研修会で東北大学と立教大学の全学共通教育についてのお話をうかがい、実際にうらやましくなった。どちらの大学も明確な教育目標と方針をたて、それをまた的確なカリキュラムと組織の運用で実行しておられるからだ。東北大学は専門知識、自主的判断力、問題即決能力、国際性を身につけるよう、具体的にはたとえば、すべての学生がコンピューターと英語が使えることを目標にして、テキストの共有、TAとCALLシステムの活用や外部試験による認定がすでにおこなわれている。立教大学も「全カリ運営センター」が7学部と見事に連携しながら、カリキュラム編成と予算執行に大きな裁量権をも

古澤ゆう子（言語社会研究科）

つ。そのため語学教育をはじめとする共通教育の大規模な改革が可能となり学生の評価も高まっているという。我々もやりたいといいながら達成できずにないたことではないか。

午後には坂本教授から「一橋においても議論でなく改革断行の時季ではないか」とのアドバイスも賜った。そのとおり、と受け止めながら、しかし、待てよとも思う。自然科学系の多い東北大学と文系の一橋大学とは学生が異なるのが当然である。また立教大学のよう語学の嘱託教員は便利かもしれないが、学内に雇用条件の異なる教員集団があることは是非はよく考えてみなければならない。隣の芝生は青く見えるというから、彼我の長所と短所を冷静にみきわめ、早まりすぎず遅すぎず、改革すべきを改革するのがよいのだと、平凡な結論に落ち着いた。

### 2. 研究・教育の多様化・専門化のなかでの共通教育への期待



毎年4月に学部ゼミに新3年生を迎えて新しい気持ちで勉強を進めていくと、どの学生もそれぞれの個性を大切にしつつ、日々新しいパースペクティブの発見に努めていることが手に取るようにわかる。しかし同時に、学生の少なからぬ部分が、後期課程に入っても、専門分野への扉に近づきながらも、自分の手でその扉を開けないままに終わってしまう、というのもまた事実である。こうした残念な現状を開拓するためにも、2003年度第2回FDで「学部教育から全学共通教育を考える」機会を得たことは、たいへん有益であった。経済学研究科の水岡不二雄教授、法学研究科の山本和彦教授、商学研究科

石倉 雅男（経済学研究科）

の山崎秀記教授による各専門分野からの鋭い問題提起、そして、ご参加頂いた皆さんとの積極的な質疑応答が展開されるなかで、研究・教育の多様化・専門化が進む現在においてこそ、共通教育の機会をもっと活用する努力が必要とされることを痛感した。さらに、当日午前にご報告を頂いた東北大学・坂本尚夫氏と立教大学・庄司洋子氏も貴重なコメントを寄せてくださいり、一刻も早く問題解決に向けた実行力が問われていることを、これまた思い知らされた。学内施設で明らかに足りない基礎条件の整備も含めて、私たちの実行力にすべてがかかっていることは、言うまでもなく明らかであろう。ただし、こうした実行力を發揮するために、それ相当の時間や人手の確保が必要であることは、もっと理解されてよいであろう。

### III. 新採用教員オリエンテーションの報告

北川 文美（大学教育研究開発センター）

新入生の入学式の翌日の4月6日、この4月から一橋大学の教員となった方々を対象としたオリエンテーションが佐野書院において行われた。前半は一橋大学の全体像という観点から、石 弘光学長、杉山 武彦学生・教育担当副学長が一橋大学の歴史を交えつつ、法人化後の状況、大学における教育活動の重要性などについてお話をしてくださいました。オリエンテーション後半は事務局から、教務課と、人事課、経理課から各担当の方がお話をしてくださいました。当日は32名の新採用教員の参加を得た。平成16年4月採用の教員が25名と、平成15年度中に採用された教員が7名であった。また、午後に附属図書館で行われた図書館ツアーには約10名の参加者があった。

一橋大学には、昨年度まで新採用の教員を対象とした研修やオリエンテーションは存在していなかった。筆者がセンターに着任した1月中旬にそれを知り、年度末のせまる2月から3月にかけ、新採用教員を対象としたハンドブックの作成が行われたが、果たしてどのような内容が「新採用教員のニーズ」に合致したものなのか、作業は学内でのアドバイスを受けつつ、手探りで進められた。では、他大学での実施状況、大学やそのほかの高等教育機関を含めた全体像はどのようなものなのだろうか。独立行政法人メディア教育開発センターの研究者グループによって行われた「マルチメディア利用実態調査2003年度調査」のデータから、「初任者研修」に関する調査結果を引用したい。

この調査は高等教育の機関もしくは部局を対象としており、1) 研修の実施の程度、2) 研修の必要性の両方をたずねている。したがって、大学側が考えている「必要性」と実際の実施状況との相違がマクロなレベルである程度明らかになるという点が興味深い。まず、「教育理念・建学の精神・沿革・組織構成といった大学の概要」について「初任者」（着任して1年以内の専任教員）を対象とした研修を実施しているか否か、について。回答に参加した4年制大学968部局中、「実施していない」が約30%、「資料配布のみ行っている」のが35%、「集合研修を実施している」大学部局は34%である。同じ項目の必要性をたずねる問い合わせに対しては、全体の87%が、「おおいに必要」もしくは「ある程度必要」

と答えている。初任者研修調査で「実施している」とされる他の項目としては、「事務手続きの方法」、「職務倫理（セクハラ・金銭にかかる不正行為など）」、「大学の経営戦略（外部資金・产学連携・地域貢献の推進など）」、「学生の実態や学生とのコミュニケーションのとり方」、「成績評価」、「カリキュラム」、「授業設計、授業方法」、「ITスキル」、「学内ネットワークやセキュリティ・ポリシーについて」と多岐にわたる。調査結果は国・公・私立での相違なども示しており、新採用教員研修に対する大学間の対応の「温度差」が現れているように見える。

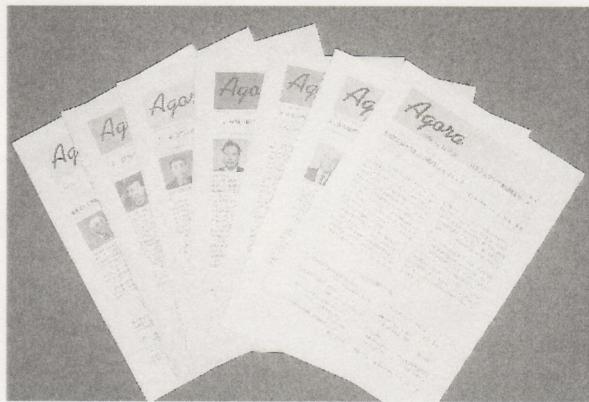
一橋大学において今回行われたオリエンテーションの事後アンケート結果によると、今回のオリエンテーションで触れられなかつた内容のうち特に、「研究環境や研究費に関する情報」、「IT・ネットワーク関係の説明」に対する要望が高かった。また、教育面において「初回の授業で学生に具体的にどのような情報を伝えるのがよいか」といった質問がでた。さらに今後、学内の委員会や組織などに関する、大学側からの具体的な情報の提供を求めるといった要望もあった。

今回作成された新採用教員向け『一橋大学 ハンドブック』には、学長、3人の副学長からのメッセージのほか、各研究科の紹介、附属図書館、大学教育研究開発センター、総合情報処理センター、留学生センター、保健センターからの情報、教務課、人事・経理・福利厚生関係の諸手続きに関する情報が盛り込まれている。そのほか、「セクシュアル・ハラスメントの防止などについて」の情報も掲載されている。ハンドブックは、大学教育研究開発センター、東西教官控え室、各研究科事務室に数冊ずつ置いてあるほか、大学のホームページ上での掲載を予定している。



*Agora*は前号までHPからでも見ることができます。

<http://www.rdcche.hit-u.ac.jp/>



平成16年度(前期)  
**大学教育研究開発センター日誌**  
(2004年4月～2004年7月)

(学内会議)

- 全学共通教育開発プロジェクト会議  
2004年4月21日／5月20日／6月26日／6月30日
- 教育力開発プロジェクト会議  
2004年4月9日／5月12日／6月2日／7月7日

(学外会議)

- 国立大学教養教育実施組織協議会  
2004年5月20日・21日 岡山大学
- (主な活動)
- 新採用教員オリエンテーション  
2004年4月6日
- 全学FD研修会(第1回)(予定)  
期日：2004年7月21日(水) 13:00～17:00  
会場：東1号館1101教室  
テーマ：授業評価から授業改善へ  
—授業の工夫の実際—



**センター所属スタッフ紹介**

■センター専任教員

藤田和也(センター長)  
北川文美(専任講師)

■センター助手

(共通科目の教育準備室等の業務と兼務)  
関根美智子(運動文化)  
多田洋子(数学統計学)  
小林美穂子(理科)  
井口(増沢)真理子(語学教育)  
菊池美紀子(語学教育)  
福田明子(語学ラボラトリ一)  
長岡弘美(語学ラボラトリ一)

■センター事務(教務課サポート)

佐々木クニ子専門職員  
長谷見麻衣非常勤職員、他

*Agora*

古代ギリシャの都市国家において市民生活の中心をなした広場。市民たちは好んでここに集まり、政治を談じ、交友を楽しんだ。また市場としての役割も果たした。

(講談社「大事典 desk」より)

**Agora**

■発行 一橋大学大学教育研究開発センター

■〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL 042-580-8000 (一橋大学) TEL 042-580-8996 FAX 042-580-8997 (教養教育担当: 佐々木)

E-mail:agora@rdche.hit-u.ac.jp

■第8号 2004年7月9日発行

■編集 センターニュース「Agora」編集委員会